

日本人の好む民主主義とは人間平等主義に根差していて、西欧の伝統的な民主主義とは質的に異なる。日本人は、たとえ貧乏人でも、成功しない者でも、教育のない者でも、そうでない者と同等に扱われる権利があると信じこんでいる。

この根強い平等主義は個々人に自信を持たせ、努力を惜しまず続けさせるところに大きな長所がある。これが日本社会に驚くべきモビリティを与えている。江戸時代から現在までの農村の家々の興亡を調べると三代以上つづいて上層を占め続けたというのは少なく、五代以上となると例外に近くなる。

インドでは貧しい下層カーストの人々が心理的にみじめではないことに驚く。そのカーストに生まれれば死ぬまで同じカーストにとどまる、競争に敗れたという悲惨さがない、という安定した気持ちと、同類がいてお互いに助け合うという連帯感を持ちうるためと思われる。「ヨコ」の繋がりが強い。

しかし日本では「タテ」の上向きの運動が激しい社会なので、下層にとどまるということは非常に心理的な負担となる。上へのルートがあるだけに、下にいることは競争に負けた者、没落者であるという含みが入ってくるからである。そのため同類を敵とみなし、「ヨコ」の関係は弱くなる一方だ。

この並立する者との競争は、日本の近代化に偉大な貢献をした。常に上向きであるということは人々の活動を活発にし、競争は仕事の推進力となった。しかし同時に分業ができないという短所も持っている。分業志向が強ければお互いが専門とするものを社会に共有してネットワークを作り、一つの大きな有機体となる。しかし日本ではすべての製品を自前で用意しようとするため、過当競争が助長され、不当なエネルギーを浪費し、格差が生じる。

このような連帯性のない孤立集団の存在は、中央集権的な政治に好都合である。孤立した諸集団を統合する行政網は各集団内部の「タテ」の線を伝わって底辺にまで難なく達することができる。江戸時代の徳川体制は士農工商という身分で「ヨコ」に区切り、藩という「タテ」の組織を設けて両者を交差させた非常に優れた制度であった。